

概況

小田頭首工改築記念碑

郷土碑文巡り (九)

会員 山 本 保

(佐伯市内池船)

国道一〇号線と二一七号線の相接続している、弥生町番匠大橋のたもと近く、大分バス佐伯行番匠のり場」のうしろに、次のような大きな石碑が建っています。碑面の正面には次のような文字が刻まれ、その台石には宛教功勞者の名前が、ずらりと並んでいます。(正面)

小田頭首工改築記念碑

佐伯市長 山本信夫 山本信夫

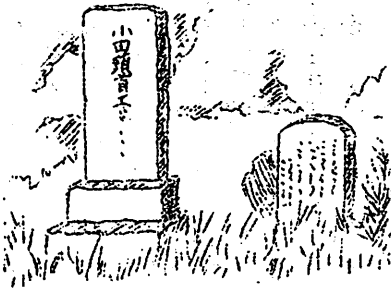
(台座—正面)

大分県知事 木下 郁

佐伯市長 山本信夫

県農林水産部長 藤原 一男

以下、県議会議員・市助役 泉茂地課長・同防災係長・耕地事務所長・市議会議員・市農林水産課長・鶴岡支所長・衛生所長・記念碑建設顧問・工事建設委員等の名前がずらりと並び、更に側面・裏面に



がけて職務主任・建設委員長・理事・監事・総代・石工・左官等に至るまで、改築工事関係者の名前が、台石一面に刻まれています。

(碑背の碑文)

(一部省略)

昭和三十八年八月八日洪水のため五十七米(五七米)決潰、復旧至難の大被害をこうむった。

加うるに河川の流路に変動を生じたため、横堰移設築の議が起り、時の小田井堰土地改良区理事長高野丞次以下役員率先して地方有志とはかり、共に推進母体となつて努力した。

しかしして時の佐伯市長山本信夫にこれに賛し、佐伯市 業主体として委託県営事業のもとに、大分市 鶴岡高山総合工業株式会社によって、昭和三十九年一月七日着工、同年九月十日竣工。延長二百廿米、総工費五千六百七十三万円(国庫補助四千二百四十六万円、県補助五百五十八万円、建設省五百四十七万九千円、市七百七十万五千円)という尅大な数字に及ぶ工事費と、鋼矢板四米打ち込み、或は油圧自働振倒機取り付けという、県下に例のない、最も近代的工作と大分県 佐伯耕地事務所指導のもとに遂に完工した。(中略) 本移設築の難易性は昔の比にあらざるとはいえ、関係官庁並びに関係地区民の熱誠努力が誠に偉大であり、昭和三十九年七月六日記念碑建設委員会を設立、委員長伊達憲蔵以下委員の努力によって、工費二十五万八千円で碑を建て、同年十月十五日日出度く竣工式と同時に記念碑の除幕式を挙行せり。

ここに其の碑文を記して後代にのこす。

記者 鶴岡支所長 山本信夫

昭和三十一年十月十五日に建立されたこの石碑の横に

河水滔々流不尽 (河水滔々といふ流れて尽さず)

藤田広々永無窮 (藤田広々と永無窮)

記者 柴矢時彦 明治二十三年八月

と刻みこま水た、小田井路横堰改築記念碑があり、仲よく並んで灌漑のいと有ふの歴史と伝えています。

この二つの重要なる石造文化財は、国道一〇号線、二一と号線が往來する無数の自動車も、静かに眺めていす。生い茂る夏草に囲まれている。

近くの番五大橋は、歩行者、自転車専用道路も取り付けたれ、更に、大橋幅工事が建設省へ九州地方建設局佐伯工事事務所の指導の下に、オリエンタルコンクリート株式会社によって植し進められていす。

また、番五大橋のたもとに、大分県交通機動隊南隊佐伯警察署番五校所が、佐伯本城消防署西部分署等が設けられていす。

番五川の堤防は、「建設省番五川水質自浄監視局、番五川水質観測所、位置一林生所大宮小田、設置年月日一昭和五十年十二月、設置者一九州地方建設局佐伯工事事務所」と標示された建物の目につきます。

八月十一日、番五大橋の上流五十米余をコンクリート製、小田井堰二百五米の長さの、おもてで、沢山の石と土が築しそうに遊泳としていす。竹森の父兄の方々に河川敷に遊歩して、水遊びの子どもたちの戯れをしていす。

これらの人々は、二八〇年前に萩藩用水の左側に造られた小田井堰・水跡の歴史を知っているのでしようか。

(おかり)

人物小伝

天放・秋月新太郎の横顔

佐伯岡谷の陸軍墓地「佐伯招魂所」に西南役官軍戦没者の巨大記念碑「敵愾之碑」がある。その碑銘に

豊月の果敢徒瀟瀟 官軍防戦し、雷撃電撃す。敵王の復讐争うて鮮血とふみ、死を視ること帰するが如し。何ぞそれ壯烈なる。まことに美しき、闘の谷、ここに忠骨を埋む。生鬼子哉、凜乎として滅せず。

正六他魚三平 秋月新太郎撰並書

とある。ただし佐伯第一の壮大な記念碑である。

秋月新太郎は佐伯藩士秋月橋門の長子として、天保十年佐伯城下に生れた。幼少の日藩藩邸敷堂に学び、安政二年十五才にして日田或宜園に遠去、後藩に帰り、四教堂の助教となつていす。

明治四年父に後つて上京、兵部省法廷中録に任用さる。時に新太郎三十二才、明治八年三月兵部省の職員録に見ると、陸軍歩兵少佐佐伯八住乃木希典と秋月新太郎の名が並んでいす。

明治十年三月西南役初参、新太郎は官軍参謀山県有朋の側近となり、戦乱を体験、平定後血戦田原坂に「崇勲之碑」が建てらるるにあり、その碑文の撰書をしていす。

後、新太郎は兵後を去つて教育界に転進、ついで東京を師範学校長を勤め、勸業貴族院議員となり、大正二年(一九一三)東京に没していす。片なし、佐伯出身者として名を成した点、矢野龍渓の「第一級の人である。(天放と号し漢詩人として有るである)。

これしいことには佐伯には秋月新太郎の撰書になる碑文が多い。前掲の「敵愾之碑」の外「高妻芳洲蒙碑銘」、「高野表之碑」、「野表之碑」、「床木孔道之碑」、「金馬橋之碑」などがそれだ。それらの事跡を端正な筆跡で適確な撰文で撰せられ、いすれも史料としてすて貴重である。

(月葉)